

『千家詩』所収作品の日本における紹介状況

——七言の作品を中心に——

三野豊浩

提要

在中国，《千家詩》是非常普遍的初步教材，自古以来流传不废。但是在日本，直到现在，还没有《千家詩》整个一本的译注。它一共收录了二百二十六首近体诗：七言绝句九十四首、七言律诗四十八首、五言绝句三十九首和五言律诗四十五首。其中五言的部分基本上和《唐诗选》重复，都是唐代的作品。但是七言的部分唐宋混在，甚至有明代的作品。这里，我把《千家詩》的七言部分做为主要的研究对象，调查它所辑录的作品在日本的介绍情况。

关键词：《千家詩》、七言绝句、七言律诗、译注

はじめに 『千家詩』とは

『千家詩』とは、中国の唐五代、宋代および明代の近体詩（絶句と律詩）のみを集めた比較的小規模な詩歌選集である。中国では『三字経』『百家姓』『千字文』と並んで「三百千」の一つに数えられ、古くから通俗的啓蒙書として人気がある。中でも『千家詩』は子供向けの初歩的な漢詩読本として普及し、誰もがよく知る名作が多く収録されている。たとえば、五言絶句では孟浩然の「春暁」など、七言絶句では張継の「楓橋夜泊」などである。中国ではその後、清の蘅塘退士（こうとうたいし）こと孫洙（そんしゅ）が『千家詩』の問題点（後述）を克復するべく新たに『唐詩三百首』を編集し、以後はこちらの方が唐詩選集の定番となった観がある。とは言え、『唐詩三百首』が完全に『千家詩』に取っ

て代わったわけではない。現在でも『千家詩』は根強い人気を誇り、様々な版が毎年のように発行されている。日本で言えば、「小倉百人一首」か「いろはがるた」のような大衆的「古典」と考えれば、当たらずといえども遠からずであろう。

現在中国で出版されている『千家詩』のテキストは、細部に様々な異同は存在するものの、順に七言絶句九十四首、七言律詩四十八首、五言絶句三十九首、五言律詩四十五首、合計二二六首を収録するものが一般的である。このうち七言の部分は南宋の人である謝枋得しゃほうとくが編集したとされ、その名を冠して「謝枋得『千家詩』」と呼ばれることもある。その後、明末清初（二七世紀の初頭）の人である王相は七言『千家詩』に注を施し、また独自に五言の『千家詩』を編集した。この時点で、『千家詩』はほぼ現在のような形になったと推測される。⁽¹⁾

『千家詩』はなぜ日本では流行らないのか

さて、前述のように中国では古くから人気のある『千家詩』であるが、日本では中国文学の専門家以外にはほとんど知られていない書物であろう。日本人にとってなじみ深い作品も少なからず収録されているにもかかわらず、管見の限り、この書物全体の訳注は、少なくとも戦後の日本では発行されていない。一方、唐詩の代表的な選集である『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』などは、それぞれ何種類もの全訳注が出版されている。

この差は一体どこから来るのであろうか。蘅塘退士の『唐詩三百首』原序は『千家詩』の問題点を指摘し、次のように記す。

世俗兒童就學、即授『千家詩』。取其易於成誦、故流傳不廢。但其詩隨手掇拾、工拙莫弁、且止五七律絕二體、而唐宋人又雜出其間、殊乖體製。

俗世間の子どもたちは勉強をはじめると、すぐに『千家詩』を学ばされる。その詩は暗誦しやすいので、流伝してすたれることがない。ただその詩は無造作に拾集されていて、工拙を区別せず、しかも五言・七言の律詩と絶句の二体に限られ、唐宋の詩人が入り混じっていて、殊の外体裁がちぐはぐである。

このように、退士が指摘する『千家詩』の問題点は、主に次の三点である。

- (一) 名作と凡作が入り混じっていること。
- (二) 作品が五言と七言の近体詩に限られていること。
- (三) 唐詩と宋詩が入り混じっていること。

のみならず、他にもいろいろな問題点があると考えられるので、以下に思いつくままに列挙してみたい。

一、七言の部分（特に絶句の部分）は、四季をたどる歳時記的な構成になっている。しかし、中国人にとってはなじみ深い年中行事も、日本人にはなじみがないものが多く、一々説明が必要である。たとえば、元日に爆竹を鳴らす、寒食節には火を使わず、煮炊きをしない、など。また歳時記としても、絶句の部分は春の詩が過半を占め、残りの三つの季節とのバランスがあまり良くない。

一、古い時代の宮中の伝統行事をうたう詩が多く、一般の読者にはなおさらなじみがない。それ以外にも、現代の平均的な日本人の感覚から遠い作品が少なくない。

一、七言の部分は唐詩と宋詩が入り混じっているのに、五言の部分は唐詩のみでまとまっており、体裁が不統一である。

一、『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』についてはすでに全訳注があるので、唐詩のスタンダードな名作を読みたければ、それで十分間に合う。実際、五言の部分はほとんどが『唐詩選』と重複しており、今さら紹介する必要がない。

一、七言絶句の部分が、北宋の儒者である程顥^{ていこう}の、これと言って面白くもない詩で始まる。このことに抵抗を感じる読者は少なくないであろう。他にも南宋の朱熹^{しゆき}・張栻^{ちやうしやく}など、道学者の詩が少なくない。書物全体に漂う道学臭がやり切れない。そうかと思うと、仏教の僧侶や道教の道士の詩などもまじっていて、わけがわからない。

一、七言の部分の最後は、明の世宗（嘉靖帝 在位一五二一～一五六六）の詩と称する七言律詩で締めくくられている。これが何とも唐突でちぐはぐな印象を与える。しかもその内容は、反乱の鎮圧に向かう大将を見送る詩で、現代の基本的な価値観に合わない。いかにも勇ましい感じの詩なので、古い時代の子ども達には人気があったのかも知れないが。

一、学術的な問題として、古いテキストには作者の間違いが非常に多い。もともとが営利目的の通俗的な出版物であるためであろうが、今日から見るといかにも杜撰な印象を受ける。のみならず、たとえば、唐・杜牧の作とされる「清明」のように、作者の信憑性に乏しい作品が少なからず含まれている⁽²⁾。等々。

他にもあるが、ひとまずこのくらいにしておこう。要するに『千家詩』の原書は、いろいろな問題のある、かなり杜撰なテキストなのである。これでは、真面目な学者の先生方が敬遠するのも無理はない。清代には『四庫全書』という大規模な編纂事業が行われたが、その中にも『千家詩』は収録されていない。つまりその当時から、通俗的な読み物としての人気はあっても、学術的な価値のある古典とは見なされていなかったのである。それでも現代中国では、作者の間違いなどを訂正した上で、多くの版が発行されている。ところが日本では、中国古典

文学の専門家は誰も本気で『千家詩』の訳注に取り組まず、かと言つて非専門家には難しすぎて手に負えずで、ほとんど放置されたまま現在に至っているのが実情である。

『千家詩』所収作品の日本における紹介状況

ここから、いよいよ本題に入る。

以上のような次第で、『千家詩』全体の日本語訳注はいまだに存在しないのであるが、後から付加されたと考えられる五言の部分はともかく、七言の部分だけでもどうにかできないかと考え、あれこれ研究を重ねている所である。七言に限定すれば、絶句九十四首、律詩四十八首、合計一四二首ということになる。手はじめに、これらの作品が現在までの所どの程度一般に紹介されているのかを調査してみたので、次にその結果を発表することにした。以下、人名はすべて敬称略)

まず、『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』について。南宋・周弼撰『三体詩』については村上哲見『三体詩』（朝日新聞社、一九六六）を、伝明・李攀龍撰『唐詩選』については前野直彬『唐詩選』（岩波書店、一九六二、六三）を、清・蘅塘退士撰『唐詩三百首』については目加田誠『唐詩三百首』（平凡社東洋文庫、一九七五）を、それぞれ参照した。これらの書物には当然それ以外の著者による訳注も存在するが、すべてを参照することはしていない。

次に、それ以外の主な参考文献を列挙する。著者名は五十音順。同一著者に複数の著作のある場合は、適宜順序を調整した。なお、戦後（一九四五以後）に初版が発行された文献に限る。

まず、漢詩解説辞典の類。

石川忠久『漢詩鑑賞辞典』（講談社、二〇〇九）以下「石川『鑑賞辞典』」

前野直彬『唐詩鑑賞辞典』（東京堂出版、一九七〇）以下

「前野『唐詩鑑賞』」

同右『宋詩鑑賞辞典』（東京堂出版、一九七七）以下「前野

『宋詩鑑賞』」

松浦友久『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、一九八七）以

下「松浦『解釈辞典』」

同右『続校注唐詩解釈辞典（付）歴代詩』（大修館書店、二

〇〇二）以下「松浦『続解釈辞典』」

向島成美『李白と杜甫の事典』（大修館書店、二〇一九）以

下「向島『李杜の事典』」

次に、個別の詩人選集の類。

青木正兒『漢詩選 8 李白』（集英社、一九九六）以下「青木

『李白』」

- 荒井健『中国詩人選集二集7黄庭堅』（岩波書店、一九六三）以下「荒井『黄庭堅』」
- 石川忠久『王維二〇〇選』（NHK出版、二〇〇七）以下「石川『王維』」
- 同右『李白一〇〇選』（NHK出版、一九九八）（文中未掲載）
- 同右『杜甫一〇〇選』（NHK出版、一九九八）以下「石川『杜甫』」
- 同右『杜牧一〇〇選』（NHK出版、二〇〇四）以下「石川『杜牧』」
- 同右『蘇東坡一〇〇選』（NHK出版、二〇〇一）以下「石川『蘇東坡』」
- 岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳注『蘇東坡全詩集』（日本図書センター、一九七八）以下「岩垂他『蘇東坡』」
- 小川環樹『中国詩人選集二集5蘇軾上』（岩波書店、一九六二）以下「小川『蘇軾上』」
- 同右『中国詩人選集二集6蘇軾下』（岩波書店、一九六二）以下「小川『蘇軾下』」
- 小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』（岩波書店、一九七五）（文中未掲載）
- 小川環樹・都留春雄・入谷仙介選訳『王維詩集』（岩波書店、一九七二）以下「小川他『王維』」
- 川合康三『李商隱詩選』（岩波書店、二〇〇八）以下「川合『李商隱』」
- 倉田淳之助『漢詩選12黄庭堅』（集英社、一九九七）以下「倉田『黄庭堅』」
- 黒川洋一『中国詩人選集9杜甫上』（岩波書店、一九五七）以下「黒川『杜甫上』」
- 近藤光男『漢詩選11蘇軾』（集英社、一九九六）以下「近藤『蘇軾』」
- 清水 茂『中国詩人選集11韓愈』（岩波書店、一九五八）以下「清水『韓愈』」
- 同右『中国詩人選集4王安石』（岩波書店、一九六二）以下「清水『王安石』」
- 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』全四冊（講談社、二〇一六）以下「下定他『杜甫全詩』」
- 鈴木虎雄『陸放翁詩解』上冊（弘文堂書房、一九五〇）以下「鈴木『陸放翁』」
- 宋元文学研究会『朱子絶句全訳注』第二冊（汲古書院、一九九四）以下「宋元『朱子絶句』」
- 高橋和巳『中国詩人選集15李商隱』（岩波書店、一九五八）以下「高橋『李商隱』」
- 武部利男『中国詩人選集7李白上』（岩波書店、一九五七）以下「武部『李白上』」
- 同右『中国詩人選集8李白下』（岩波書店、一九五八）以下「武部『李白下』」

- 都留春雄『中国詩人選集6王維』（岩波書店、一九五八）以下「都留『王維』」
- 松浦友久『李白詩選』（岩波書店、一九九七）以下「松浦『李白』」
- 同右『杜牧詩選』（岩波書店、二〇〇四）以下「松浦『杜牧』」
- 村上哲見・浅見洋二『鑑賞中国の古典②蘇軾・陸游』（角川書店、一九八九）以下「村上他『蘇軾・陸游』」
- 目加田誠『漢詩選9杜甫』（集英社、一九九六）以下「目加田『杜甫』」
- 吉川幸次郎著、興膳宏編『杜甫詩注』第三冊（岩波書店、二〇一四）以下「吉川『杜甫詩注』第三冊」
- 同右『杜甫詩注』第五冊（岩波書店、二〇一六）以下「吉川『杜甫詩注』第五冊」
- 同右『杜甫詩注』第九冊（岩波書店、二〇一五）以下「吉川『杜甫詩注』第九冊」
- 最後に、各種の詩歌選集の類。
- 石川忠久『春の詩一〇〇選』（NHK出版、一九九六）以下「石川『春の詩』」
- 同右『夏の詩一〇〇選』（NHK出版、一九九六）以下「石川『夏の詩』」
- 同右『秋の詩一〇〇選』（NHK出版、一九九六）以下「石川『秋の詩』」
- 川『秋の詩』
- 同右『冬の詩一〇〇選』（NHK出版、一九九六）以下「石川『冬の詩』」
- 井波律子『中国名詩集』（岩波書店、二〇一〇）以下「井波『名詩集』」
- 猪口篤志『中国歴代漢詩選』（右文書院、二〇〇九）以下「猪口『漢詩選』」
- 今關天彭・辛島驍『宋詩選』（集英社、一九九六）以下「今關他『宋詩選』」
- 入谷仙介『宋詩選』（朝日新聞社、一九六七）以下「入谷『宋詩選』」
- 同右『唐詩の世界』（筑摩書房、一九九〇）以下「入谷『唐詩』」
- 小川昭一『中国の名詩鑑賞7晚唐』（明治書院、一九七六）以下「小川『晚唐』」
- 小川環樹『宋詩選』（筑摩書房、一九六七）以下「小川『宋詩選』」
- 柏木如亭『訳注聯珠詩格』（岩波書店、二〇〇八）以下「柏木『聯珠詩格』」
- 川合康三『新編中国名詩選（中）』（岩波書店、二〇一五）以下「川合『名詩選（中）』」
- 同右『新編中国名詩選（下）』（岩波書店、二〇一五）以下「川合『名詩選（下）』」

佐藤 保『中国の名詩鑑賞8 宋詩附金』（明治書院、一九七
八）以下「佐藤『宋詩附金』」

同右『はじめの宋詩』（明治書院、二〇一二）（文中未掲
載）

沢口剛雄『唐宋詩の鑑賞』（福村出版、一九六九）以下「沢
口『唐宋詩』」

錢鍾書著、宋代詩文研究会訳注『宋詩選注1』（平凡社、二
〇〇四）以下「錢『選注1』」

同右『宋詩選注2』（平凡社、二〇〇四）以下「錢『選注2』」

同右『宋詩選注3』（平凡社、二〇〇四）以下「錢『選注3』」

同右『宋詩選注4』（平凡社、二〇〇五）以下「錢『選注4』」

瀧口房州『宋詩百人一首』（三省堂、二〇一七）以下「瀧口
『百人一首』」

田中克己・小野忍・小山正孝編訳『中国古典文学大系17 唐代
詩集上』（平凡社、一九六九）（文中未掲載）

中島敏夫『中国の名詩鑑賞5 盛唐』（明治書院、一九七八）
以下「中島『盛唐』」

前野直彬『中国古典文学大系18 唐代詩集下』（平凡社、一九
七〇）以下「前野『唐代下』」。

同右『中国古典文学大系19 宋・元・明・清詩集』（平凡社、
一九七三）（文中未掲載）

松浦友久『中国名詩集 美の歲月』（朝日新聞社、一九九
二）以下「松浦『名詩集』」。

松浦友久・田口暢穂『中国の名詩鑑賞6 中唐』（明治書院、
一九七六）以下「松浦他『中唐』」。

松枝茂夫『中国名詩選（中）』（岩波書店、一九八四）以下
「松枝『名詩選（中）』」

同右『中国名詩選（下）』（岩波書店、一九八六）以下「松枝
『名詩選（下）』」

山本和義・大野修作・中原健一『鑑賞中国の古典② 宋代詩
詞』（角川書店、一九八八）以下「山本他『宋代詩詞』」

吉川幸次郎・小川環樹編『唐詩選』（筑摩書房、一九七三）
以下「吉川他『唐詩選』」

筆者の収集力に限度があるため、把握し切れていない文献が
あると思われるが、⁽⁴⁾少なくとも唐詩に関しては、ほぼ十分では
ないかと思われる。参照した文献は以上にとどまらないが、
『千家詩』所収の詩を一首も確認できなかった文献は、最初か
ら掲載しないことにした。

以上の他、昭和六十年（一九八五）の開講から令和二年（二
〇二〇）現在に至るまでのNHKラジオ放送用テキスト『漢詩
をよむ』をすべて確認した。これらは書名をすべて『漢詩をよ
む』のみとし、副題は省略した。また、他の書物にほとんど紹
介されていない場合を除き、なるべく控えめに紹介した。特に
石川氏のテキストは相当多数に上るため、同じ詩が『漢詩鑑賞
辞典』または『くー〇〇選』のシリーズに収録されている場合

は、すべて割愛した。

以上の文献を確認した上で、収録状況によって次の四段階に区分し、記号を記した。

◎ 多くの文献に収録され、日本でも十分に紹介されていると考えられる作品。

○ ◎ほどではないが、日本でもある程度紹介されていると考えられる作品。

△ 日本でも一応紹介されているものの、まだ紹介が不十分であると考えられる作品。

× 管見の限り、まだ日本語の訳注(5)の存在しない作品。

各詩の詩題は、『全唐詩』か『全宋詩』のいずれかに収録されている場合は、それらの詩題を基準とし、『千家詩』旧本（一九九一年発行の江蘇広陵古籍刻印社影印、揚州古籍書店『白話注解千家詩』。おそらくは清代のテキストの影印本）のそれを注記した。『千家詩』の詩を調べるのに、なぜ『千家詩』自身の表記を基準としないのか、と思われるかも知れない。しかし、それには理由がある。普通、学術的な論述にあたって底本とすべきは、最も古く、最も信頼できる文献と相場が決まっている。ところが『千家詩』の場合、もともと学術的な書物ではないので、古いテキストに溯れば溯るほど、むしろ作者の誤り、詩題や詩句の異同の問題が増加し、正確さからほど遠いも

のようになって行くのである。現代中国ではそうした問題をそれなりに解決したものが出版されているが、真偽の判断は編者によって解釈が異なるため、細部の異同が多く見られる。そのため、新しい本を底本にしようにも、どの版を底本とすればよいのか判断に苦しむ状況となっている。筆者は個人的には李夢生(りむせい)『千家詩全解』（復旦大学出版社、二〇〇九）を比較的信頼できるテキストと考えているが、これとて全面的に依拠するには若干の留保が残る。そうした次第で、ここでは『全唐詩』『全宋詩』を基準とすることにしたい。『全唐詩』『全宋詩』の詩題と『千家詩』旧本の詩題が一致している場合は、異同を記さなかった。また文字の表記は原則として新字体とした。またインターネットなど、電子メディアの情報は今回は除外し、書物の形態のものに限定した。

本来ならば、その作品の収録が確認されたすべての文献を網羅すべきであろうが、特に◎に該当するような名作、たとえば張継の「楓橋夜泊」のような詩の場合、あまりに多数の文献に収録されており、とても網羅し切れない。そうした作品については、比較的重要度の高いと思われる文献を残し、そうでないものは割愛した。ただし、重要度の判断は多分に筆者の主観によるものなので、公正を欠く場合があるかも知れない。この点あらかじめご了承願いたい。また各詩題の下の書名は、著者名による五十音順とした。同一の著者の複数の書物に収録されている場合は、最も代表的なもののみを紹介し、重要度の低いも

のは割愛した。この判断も多分に筆者の主観による。それでは、『千家詩』所収の作品を、順に見て行くことにしよう。

七言絶句

『千家詩』所収の七言絶句は合計九十四首。そのうち唐詩は三十三首、宋詩は六十一首である。

〇一「偶成」

【宋】程顥
『全宋詩』卷七一五（第一二冊）。『千家詩』日本「春日偶成」。訳注未見。×

〇二「春日」

【宋】朱熹
『全宋詩』卷二三八四（第四四冊）。宋元『朱子絶句』。〇

〇三「春夜」

【宋】蘇軾
『全宋詩』卷八三一（第一四冊）。『千家詩』日本「春宵」。石川『鑑賞辞典』、小川『蘇軾下』、川合『名詩選（下）』、佐藤『宋詩附金』、前野『宋詩鑑賞』、松浦『統解釈辞典』、松枝『名詩選（下）』、村上他『蘇軾・陸游』など。◎

〇四「城東早春」

【唐】楊巨源

『全唐詩』卷三三三。石川『冬の詩』。〇

〇五「夜直」

【宋】王安石
『全宋詩』卷五六八（第一〇冊）。『千家詩』日本「春夜」。石川『鑑賞辞典』、小川『宋詩選』、清水『王安石』、錢『選注』、前野『宋詩鑑賞』、松枝『名詩選（下）』など。◎

〇六「早春呈水部張十八員外二首」其一

【唐】韓愈
『全唐詩』卷三四四。『千家詩』日本「初春小雨」。石川『鑑賞辞典』、川合『名詩選（中）』など。〇

〇七「元日」

【宋】王安石
『全宋詩』卷五六四（第一〇冊）。佐藤『漢詩をよむ』（二）〇一三後期）など。〇

〇八「上元侍飲樓上三首呈同列」其一

【宋】蘇軾
『全宋詩』卷八一九（第一四冊）。『千家詩』日本「上元侍宴」。岩垂他『蘇東坡』第五卷に訳注が見えるが、やや生硬なもの。△

〇九「立春日禊亭偶成」

【宋】張栻
『全宋詩』卷二四二〇（第四五冊）。『千家詩』日本「立春偶成」。井波『名詩集』。〇

一〇「題明王打毬図」 【宋】晁説之

『全宋詩』卷一二〇九（第二一冊）。『千家詩』旧本「打毬図」。訳注未見。×

一一「宮詞一百首」其九一 【唐】王建

『全唐詩』卷三〇二。『千家詩』旧本「宮詞」。『三体詩』の他、松浦他『中唐』。○

一二「廷試」 【宋】夏竦

『全宋詩』卷二六一（第三冊）。『千家詩』旧本「宮詞」其二。訳注未見。×

一三「過華清宮」 【宋】杜常

『全宋詩』卷七八一（第一三冊）。『千家詩』旧本「詠華清宮」。『三体詩』（詩題「華清宮」）。○

※ この詩は『全唐詩』卷七三一にも見える（詩題「華清宮」）が、現在では作者は宋代の人であることが明らかなので、ここでは宋詩として扱う。

一四「清平調詞三首」其一 【唐】李白

『全唐詩』卷一六四。『千家詩』旧本「清平調詞」。『唐詩選』『唐詩三百首』の他、青木『李白』、石川『鑑賞辞典』、武部『李白下』、中島『盛唐』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解

釈辞典』、向島『李杜の事典』など。◎

一五「題邸間壁」 【宋】鄭会

『全宋詩』卷二九五九（第五六冊）。訳注未見。×

一六「絶句四首」其三 【唐】杜甫

『全唐詩』卷二二八。『千家詩』旧本「絶句」。石川『鑑賞辞典』、川合『名詩選（中）』、黒川『杜甫上』、下定他『杜甫全詩』第二冊、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、向島『李杜の事典』など。◎

一七「海棠」 【宋】蘇軾

『全宋詩』卷八〇五（第一四冊）。石川『蘇東坡』、川合『名詩選（下）』、近藤『蘇軾』など。◎

一八「清明」 【唐】杜牧

『全唐詩』失収。石川『鑑賞辞典』、井波『名詩集』、小川『晚唐』、川合『名詩選（下）』、佐藤『漢詩をよむ』（二〇一三年前期）、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（下）』など。◎

一九「清明感事三首」其一 【宋】王禹偁

『全宋詩』卷七一（第二冊）。『千家詩』旧本「清明」。石川

『春の詩』、宇野直人『漢詩をよむ』(二〇一〇前期)。〇

二〇「社日」 【唐】王駕

『全唐詩』卷六九〇。『三体詩』の他、石川『秋の詩』、井波『名詩集』、入谷『唐詩』、宇野『漢詩をよむ』(二〇一〇前期)、小川『晚唐』など。◎

二一「寒食」 【唐】韓翃

『全唐詩』卷二四五。『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』の他、石川『春の詩』、川合『名詩選(中)』、松浦『統解釈辞典』、松枝『名詩選(下)』など。◎

二二「江南春絶句」 【唐】杜牧

『全唐詩』卷五二二。『千家詩』旧本「江南春」。『三体詩』の他、石川『鑑賞辞典』、井波『名詩集』、入谷『唐詩』、小川『晚唐』、川合『名詩選(下)』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選(下)』など。◎

二三「下第後上永崇高侍郎」 【唐】高蟾

『全唐詩』卷六六八。『千家詩』旧本「上高侍郎」。柏木『聯珠詩格』に訳注が見えるが、やや古風なもの。△

二四「詩一首」 【宋】釈志南

『全宋詩』卷二二九五(第四五冊)。『千家詩』旧本「絶句」。柏木『聯珠詩格』に訳注が見えるが、やや古風なもの。△

二五「遊園不值」 【宋】葉紹翁

『全宋詩』卷二九四九(第五六冊)。『千家詩』旧本「遊園不值」。小川『宋詩選』、銭『選注4』、松枝『名詩選(下)』など。〇

二六「客中行」 【唐】李白

『全唐詩』卷二八一。詩題は「客中作」。『唐詩選』の他、青木『李白』、石川『鑑賞辞典』、武部『李白上』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選(中)』、向島『李杜の事典』など。◎

二七「題饒州酒務庁屏」 【宋】劉季孫

『全宋詩』卷七二三(第二二冊)。『千家詩』旧本「題屏」。訳注未見。×

二八「絶句漫興九首」其五 【唐】杜甫

『全唐詩』卷二二七。『千家詩』旧本「漫興」。石川『杜甫』、佐藤『漢詩をよむ』(二〇一三後期)、下定他『杜甫全詩』第二冊、吉川『杜甫詩注』第九冊など。◎

二九「桃」

【宋】謝枋得

『全宋詩』卷三四七七（第六六冊）。『千家詩』旧本「慶全庵桃花」。瀧口『百人一首』に紹介されているが、原詩と訓読のみで、現代語訳はない。△

『全宋詩』卷五六五（第一〇冊）。今關他『宋詩選』、佐藤『漢詩をよむ』（二〇一四後期）、清水『王安石』。○

三五「湖上」

【宋】徐元杰

『全宋詩』卷三二五一（第六〇冊）。訳注未見。×

三〇「元和十一年自朗州召至京戲贈看花諸君子」

【唐】劉禹錫

『全唐詩』卷三六五。『千家詩』旧本「玄都觀桃花」。『唐詩選』の他、石川『漢詩をよむ』（一九八六後期）、川合『名詩選（中）』。○

三六「絶句漫興九首」其七

【唐】杜甫

『全唐詩』卷二二七。『千家詩』旧本「漫興」。下定他『杜甫全詩』第二冊、吉川『杜甫詩注』第九冊など。○

三一「再遊玄都觀」

【唐】劉禹錫

『全唐詩』卷三六五。石川『漢詩をよむ』（一九八六後期）、川合『名詩選（中）』。○

三七「雨晴」

【唐】王駕

『全唐詩』卷六九〇。『千家詩』旧本「春晴」。『三体詩』（詩題「晴景」）の他、柏木『聯珠詩格』。○

三二「滁州西澗」

【唐】韋応物

『全唐詩』卷一九三。『三体詩』『唐詩三百首』の他、石川『冬の詩』、川合『名詩選（中）』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（下）』など。◎

三八「春暮」

【宋】曹豳

『全宋詩』卷二八五一（第五四冊）。『千家詩』旧本「春暮」。訳注未見。×

三三「花影」

【宋】謝枋得

『全宋詩』卷三四七七（第六六冊）。訳注未見。×

三九「惜春」

【宋】朱淑真

『全宋詩』卷二五八四（第二八冊）。『千家詩』旧本「落花」。訳注未見。×

三四「北山」

【宋】王安石

四〇「暮春遊小園」

【宋】王琪

『全宋詩』卷三五二一（第六七冊）。『千家詩』旧本「春暮遊小園」。訳注未見。×

四一「鶯梭」 【宋】劉克莊

『全宋詩』卷三〇八一（第五八冊）。訳注未見。×

四二「書事」 【宋】葉采

『全宋詩』卷三三三八（第六三冊）。『千家詩』旧本「暮春即事」。訳注未見。×

四三「題鶴林寺僧舍」 【唐】李涉

『全唐詩』卷四七七。『千家詩』旧本「登山」。『三体詩』の他、石川『漢詩をよむ』（二〇〇三後期）、前野『唐代下』。

四四「蚕婦吟」 【宋】謝枋得

『全宋詩』卷三四八〇（第六六冊）。沢口『唐宋詩』。○

四五「遊城南十六首」其三「晚春」 【唐】韓愈

『全唐詩』卷三四三三。『千家詩』旧本「晚春」。石川『春の詩』。○

四六「曉登万花川谷看海棠二首」其二 【宋】楊万里

『全宋詩』卷二二一一（第四二冊）。『千家詩』旧本「傷春」。訳注未見。×

四七「春晚二首」其二 【宋】王令

『全宋詩』卷七〇四（第二二冊）。『千家詩』旧本「送春」。訳注未見。×

四八「三月晦日贈劉評事」 【唐】賈島

『全唐詩』卷五七四。『千家詩』旧本「三月晦日送春」。『三体詩』の他、井波『名詩集』、佐藤『漢詩をよむ』（二〇一三後期）、松浦他『中唐』など。○

四九「居洛初夏作」 【宋】司馬光

『全宋詩』卷五二二（第九冊）。『千家詩』旧本「客中初夏」。石川『鑑賞辞典』、今關他『宋詩選』、宇野『漢詩をよむ』（二〇一〇前期）、松浦『統解积辞典』など。○

五〇「約客」 【宋】趙師秀

『全宋詩』卷二八四一（第五四冊）。『千家詩』旧本「有約」。今關他『宋詩選』、小川『宋詩選』、錢『選注3』、山本他『宋代詩詞』など。○

五一「閑居初夏午睡起二絶句」其一 【宋】楊万里

- 『全宋詩』卷二二七七(第四二冊)。「千家詩」旧本「初夏
睡起」。今關他『宋詩選』、小川『宋詩選』、川合『名詩選
(下)』、佐藤『宋詩附金』、錢『選注3』、松枝『名詩選
(下)』、山本他『宋代詩詞』など。◎
- 五二「三衢道中」 【宋】曾幾
『全宋詩』卷一六五九(第二九冊)。石川『夏の詩』、錢
『選注2』、前野『宋詩鑑賞』など。○
- 五三「清昼」 【宋】朱淑真
『全宋詩』卷一五八五(第二八冊)。「千家詩」旧本「即
景」。訳注未見。×
- 五四「初夏遊張園」 【宋】戴復古
『全宋詩』卷二八一九(第五四冊)。「千家詩」旧本「夏
日」。石川『夏の詩』、佐藤『漢詩をよむ』(二〇一三前期)
など。○
- 五五「鄂州南樓書事四首」其一 【宋】黃庭堅
『全宋詩』卷九九六(第一七冊)。「千家詩」旧本「晚樓閒
坐」。石川『漢詩をよむ』(一九九二前期)、倉田『黃庭堅』
など。○
- 五六「山亭夏日」 【唐】高駢
『全唐詩』卷五九八。石川『鑑賞辭典』、入谷『唐詩』、小
川『晚唐』、佐藤『漢詩をよむ』(二〇一三前期)、前野『唐
詩鑑賞』、松浦『解釈辭典』など。◎
- 五七「四時田園雜興六十首」のうち「夏日田園雜興十二絶」其七
 【宋】范成大
『全宋詩』卷二二六八(第四一冊)。「千家詩」旧本「田
家」。今關他『宋詩選』、小川『宋詩選』、佐藤『漢詩をよ
む』(二〇一三前期)、錢『選注3』、松枝『名詩選(下)』、
山本他『宋代詩詞』など。◎
- 五八「鄉村四月」 【宋】翁卷
『全宋詩』卷二六七三(第五〇冊)。「千家詩」旧本「村庄
即事」。石川『春の詩』、小川『宋詩選』、錢『選注3』、松枝
『名詩選(下)』など。◎
- 五九「題張十一旅舍三詠」其一「榴花」 【唐】韓愈
『全唐詩』卷三四三。「千家詩」旧本「題榴花」。石川『春
の詩』、柏木『聯珠詩格』。○
- 六〇「村晚」 【宋】雷震
『全宋詩』卷三五九四(第六八冊)。訳注未見。×

六一「書湖陰先生壁二首」其一

【宋】王安石

『全宋詩』卷五六六(第一〇冊)、『千家詩』旧本「茅簷」。

今關他『宋詩選』、川合『名詩選(下)』、清水『王安石』、錢

『選注1』、前野『宋詩鑑賞』、山本他『宋代詩詞』など。◎

六二「金陵五題」其一「烏衣巷」

【唐】劉禹錫

『全唐詩』卷三六五。『千家詩』旧本「烏衣巷」。『唐詩三百

首』の他、石川『鑑賞辞典』、井波『名詩集』、川合『名詩選

(中)』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選

(下)』など。◎

六三「渭城曲」

【唐】王維

『全唐詩』卷一二八。『千家詩』旧本「送使安西」。一に

「送元二使安西」。『三体詩』『唐詩三百首』の他、石川『鑑賞

辞典』、井波『名詩集』、入谷『唐詩』、小川他『王維詩集』、

川合『名詩選(中)』、都留『王維』、前野『唐詩鑑賞』、松浦

『解釈辞典』、松枝『名詩選(中)』など。◎

六四「与史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛」

【唐】李白

『全唐詩』卷一八二。『千家詩』旧本「題北榭碑」。『唐詩

選』の他、石川『鑑賞辞典』、武部『李白上』、松浦『李白』、

向島『李杜の事典』など。◎

六五「題淮南寺」

【宋】程顥

『全宋詩』卷七一五(第二二冊)。訳注未見。×

六六「入瑞巖道間得四絶句呈彦集充父二兄」其三【宋】朱熹

『全宋詩』卷二三八四(第四四冊)。『千家詩』旧本「秋

月」。宋元『朱子絶句』○

六七「七夕」

【宋】楊朴

『全宋詩』卷二十一(第一冊)。訳注未見。×

六八「立秋日」

【宋】劉翰

『全宋詩』卷二四一二(第四五冊)。『千家詩』旧本「立

秋」。石川『漢詩をよむ』(二〇〇一前期)、井波『名詩集』、

柏木『聯珠詩格』○

※ 柏木『聯珠詩格』は作者を陳月窓、詩題を「秋暁」と

する。

六九「秋夕」

【宋】杜牧

『全唐詩』卷五二四。『千家詩』旧本「七夕」。『三体詩』

『唐詩三百首』の他、石川『杜牧』、佐藤『漢詩をよむ』(二

〇一三前期)、松浦『杜牧』など。◎

※ 『三体詩』は作者を王建とする。

七〇「陽関詞三首」其三「中秋月」

【宋】蘇軾

『全宋詩』卷七九八（第一四冊）。『千家詩』旧本「中秋」。

石川『蘇東坡』、小川『蘇軾上』、近藤『蘇軾』、佐藤『漢詩をよむ』（二〇一三年前期）、銭『選注2』、松枝『名詩選（下）』など。◎

雨」。石川『鑑賞辞典』、井波『名詩集』、今關他『宋詩選』、

入谷『宋詩選』、小川『蘇軾上』、川合『名詩選（下）』、近藤『蘇軾』、佐藤『宋詩附金』、銭『選注2』、松浦『統解釈辞典』、前野『宋詩鑑賞』、松枝『名詩選（下）』、山本他『宋代詩詞』など。◎

七一「江樓旧感」

【唐】趙嘏

『全唐詩』卷五五〇。『千家詩』旧本「江樓有感」。『唐詩選』（詩題「江樓書感」）の他、石川『秋の詩』、小川『晩唐』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（下）』など。◎

七五「入直召对選德殿賜茶而退」

【宋】周必大

『全宋詩』卷二二二二（第四三冊）。『千家詩』旧本「入直」。訳注未見。×

七六「夏日登車盖亭十絶」其四

【宋】蔡確

『全宋詩』卷七八三（第一三冊）。『千家詩』旧本「水亭」。訳注未見。×

七二「題臨安邸」

【宋】林升

『全宋詩』卷二六七六（第五〇冊）。『千家詩』旧本「西湖」。石川『冬の詩』、松浦『名詩集』、松枝『名詩選（下）』など。○

七七「六月十六日宣鎖」

【宋】洪咨夔

『全宋詩』卷二八九六（第五五冊）。『千家詩』旧本「禁鎖」。訳注未見。×

七三「曉出淨慈送林子方二首」其二

【宋】楊万里

『全宋詩』卷二二九六（第四二冊）。『千家詩』旧本「西湖」。石川『漢詩をよむ』（二〇〇一前期）。○

七八「寄王舍人竹楼」

【唐】李嘉祐

『全唐詩』卷二〇七。『千家詩』旧本「竹楼」。訳注未見。×

七四「飲湖上初晴後雨二首」其二

【宋】蘇軾

『全宋詩』卷七九二（第一四冊）。『千家詩』旧本「湖上初

七九「紫薇花」

【唐】白居易

『全唐詩』卷四四二。『千家詩』旧本「直中書省」。石川『夏の詩』。○

八〇「觀書有感二首」其一 【宋】朱熹

『全宋詩』卷二三八四（第四四冊）。『千家詩』旧本「觀書有感」。今關他『宋詩選』（詩題「觀書感興二首」）、宋元『朱子絶句』。○

八一「觀書有感二首」其二 【宋】朱熹

『全宋詩』卷二三八四（第四四冊）。『千家詩』旧本「泛舟」。今關他『宋詩選』（詩題「觀書感興二首」）、宋元『朱子絶句』。○

八二「冷泉」

【宋】林槿

『全宋詩』卷一〇三一（第一八冊）。『千家詩』旧本「冷泉亭」。訳注未見。×

八三「贈劉景文」

【宋】蘇軾

『全宋詩』卷八一五（第一四冊）。『千家詩』旧本「冬景」。石川『鑑賞辞典』、小川『蘇軾下』、近藤『蘇軾』、佐藤『漢詩をよむ』（二〇一三後期）、松枝『名詩選（下）』など。◎

八四「楓橋夜泊」

【唐】張繼

『全唐詩』卷二四二。『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』の他、石川『鑑賞辞典』、入谷『唐詩』、川合『名詩選（中）』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（下）』など。◎

八五「寒夜」

【宋】杜耒

『全宋詩』卷二八二三（第五四冊）。石川『冬の詩』（作者は杜耒）、猪口『漢詩選』など。○

八六「霜月」

【唐】李商隱

『全唐詩』卷五三九。川合『李商隱』、高橋『李商隱』。○

八七「梅」

【宋】王淇

『全宋詩』卷三五二二（第六七冊）。訳注未見。×

八八「奉酬臈庵李侍郎五首」其二

【宋】白玉蟾

『全宋詩』卷三一三八（第六〇冊）。『千家詩』旧本「早春」。石川『漢詩をよむ』（一九九六後期）。○

八九「梅花」

【宋】盧梅坡

『全宋詩』卷三七四九（第七二冊）。『千家詩』旧本「雪梅」。石川『冬の詩』。○

九〇「梅花十絶」其九 【宋】方岳

『全宋詩』卷三二九九（第六一冊）。『千家詩』旧本「又（雪梅）」。石川『鑑賞辞典』、猪口『漢詩選』、柏木『聯珠詩格』。○

※ 『千家詩』旧本は作者を盧梅坡とし、八九と連作とする。

賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（下）』など。◎

九四「題峻極中院法堂壁」 【宋】無名氏

『全宋詩』卷三三七（第七一冊）。『千家詩』旧本「題壁」。訳注未見。×

七言律詩

九一「絶句」

【宋】牧童

『全宋詩』卷二二八八（第二二冊）。『千家詩』旧本「答鍾弱翁」。石川『漢詩をよむ』（一九九七前期）。ただし作者を関名、詩題を「牧童」とする。△

※ この詩は『全唐詩』卷八五八にも見える。作者は呂巖。詩題は「牧童」。

『千家詩』所収の七言律詩は合計四十八首。そのうち唐詩は二十四首、宋詩は二十二首、明詩は二首である。

〇一「早朝大明宮呈兩省僚友」 【唐】賈至

『全唐詩』卷二三五。『千家詩』旧本「早朝大明宮」。『唐詩選』の他、石川『王維』。◎

九二「泊秦淮」

【唐】杜牧

『全唐詩』卷五二二。『千家詩』旧本「秦淮夜泊」。『三体詩』『唐詩三百首』の他、石川『鑑賞辞典』、入谷『唐詩』、小川『晚唐』、川合『名詩選（下）』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（下）』など。◎

〇二「奉和賈至舍人早朝大明宮」 【唐】杜甫

『全唐詩』卷二二五。『千家詩』旧本「和賈舍人早朝」。石川『杜甫』、下定他『杜甫全詩』第一冊、吉川『杜甫詩注』第五冊など。○

九三「帰雁」

【唐】錢起

『全唐詩』卷二二九。『三体詩』『唐詩選』の他、石川『春の詩』、入谷『唐詩』、川合『名詩選（中）』、前野『唐詩鑑

〇三「和賈舍人早朝大明宮作」 【唐】王維

『全唐詩』卷二二八。『千家詩』旧本「和賈舍人早朝」。『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』の他、石川『王維』。◎

○四「奉和中書舍人賈至早朝大明宮」

【唐】岑參

『全唐詩』卷二〇一。『千家詩』旧本「和賈舍人早朝」。『三
 体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』の他、石川『王維』。◎

※ 石川『王維』は、〇一〜〇四の四首をまとめて紹介し
 ている。

○九「插花吟」

【宋】邵雍

『全宋詩』卷三七〇（第七冊）。佐藤『漢詩をよむ』（二〇
 一三後期）。○

一〇「寄遠」

【宋】晏殊

『全宋詩』卷一七一（第三冊）。『千家詩』旧本「寓意」。今
 關他『宋詩選』、小川『宋詩選』、佐藤『宋詩附金』、錢『選
 注』（詩題「無題」）、前野『宋詩鑑賞』など。◎

○五「上元進詩」

【宋】蔡襄

『全宋詩』卷三八八（第七冊）。『千家詩』旧本「上元
 進詩」。詠注未見。×

一一「寒食清明二首」其一

【宋】劉克莊

『全宋詩』卷三〇四一（第五八冊）。『千家詩』旧本「寒
 食」。詠注未見。×

※ 『千家詩』旧本は趙鼎の作とするが、『全宋詩』の趙鼎
 の部分には見えない。

○六「恭和御製上元觀灯」

【宋】王珪

『全宋詩』卷四九四（第九冊）。『千家詩』旧本「上元
 觀灯」。詠注未見。×

○七「侍宴安樂公主新宅應制」

【唐】沈佺期

『全唐詩』卷九六。『千家詩』旧本「侍宴」。『唐詩選』。○

一二「清明」

【宋】黃庭堅

○八「戲答元珍」

【宋】歐陽修

『全宋詩』卷二九二（第六冊）。『千家詩』旧本「答丁元
 珍」。小川『宋詩選』、川合『名詩選（下）』、佐藤『宋詩附
 金』、錢『選注』、前野『宋詩鑑賞』、松枝『名詩選（下）』

一三「清明」

【宋】高翥

『全宋詩』卷二八五九（第五五冊）。詠注未見。×

など。◎

一四「郊行即事」

【宋】程顥

『全宋詩』卷七一五（第二二冊）。今關他『宋詩選』。○

一五「鞦韆」【宋】釈徳洪（釈恵洪）

『全宋詩』巻一三三七（第二三冊）。訳注未見。×

他、前野『唐代下』○

一六「曲江二首」其一【唐】杜甫

『全唐詩』巻二二五。『千家詩』旧本「曲江对酒」其一。川合『名詩選（中）』、黒川『杜甫上』、下定他『杜甫全詩』第一冊、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（中）』、向島『李杜の事典』、目加田『杜甫』、吉川『杜甫詩注』第五冊など。◎

二〇「答李儋元錫」【唐】韋応物
『全唐詩』巻一八八。『千家詩』旧本「答李儋」。『唐詩三百首』○

一七「曲江二首」其二【唐】杜甫

『全唐詩』巻二二五。『千家詩』旧本「曲江对酒」其二。石川『鑑賞辞典』、川合『名詩選（中）』、黒川『杜甫上』、下定他『杜甫全詩』第一冊、向島『李杜の事典』、目加田『杜甫』、吉川『杜甫詩注』第五冊など。◎

二一「江村」【唐】杜甫
『全唐詩』巻二二六。『千家詩』旧本「清江」。石川『鑑賞辞典』、川合『名詩選（中）』、黒川『杜甫上』、下定他『杜甫全詩』第二冊、中島『盛唐』前野『唐詩鑑賞』、松浦『統解解釈辞典』、松枝『名詩選（中）』、向島『李杜の事典』、目加田『杜甫』、吉川『杜甫詩注』第九冊など。◎

一八「黄鶴楼」【唐】崔顥

『全唐詩』巻一三〇。『三体詩』『唐詩三百首』の他、石川『鑑賞辞典』、入谷『唐詩の世界』、川合『名詩選（中）』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選（中）』など。◎

二二「夏日三首」其一【宋】張耒
『全宋詩』巻一一六九（第二〇冊）。『千家詩』旧本「夏日」。訳注未見。×

一九「春夕」【唐】崔塗

『全唐詩』巻六七九。『千家詩』旧本「旅懷」。『三体詩』の

二三「積雨輞川荘作」【唐】王維
『全唐詩』巻一二八。『千家詩』旧本「輞川積雨」。『三体詩』『唐詩三百首』の他、石川『王維』、小川他『王維』、都留『王維』など。◎

二四「東湖新竹」【宋】陸游

『全宋詩』卷二一五八(第三九冊)、『千家詩』日本「新竹」。鈴木『陸放翁』に訳注が見えるが、やや生硬なもの。

△

二五「夏夜宿表兄話旧」

【唐】竇叔向

『全唐詩』卷二七一。『千家詩』日本「表兄話旧」。前野『唐代下』。○

二六「秋日偶成二首」其二

【宋】程顥

『全宋詩』卷七一五(第一二冊)、『千家詩』日本「偶成」。

猪口『漢詩選』、今關他『宋詩選』。○

二七「遊月陂」

【宋】程顥

『全宋詩』卷七一五(第一二冊)、『千家詩』日本「遊月陂」。石川『漢詩をよむ』(一九九六後期)。○

二八「秋興八首」其一

【唐】杜甫

『全唐詩』卷二三〇。『千家詩』日本「秋興」。『唐詩選』の他、石川『鑑賞辞典』、川合『名詩選(中)』、黒川『杜甫上』、下定他『杜甫全詩』第三冊、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、松枝『名詩選(中)』、向島『李杜の事典』、目加田『杜甫』など。◎

二九「秋興八首」其三

【唐】杜甫

三〇「秋興八首」其五

【唐】杜甫

三一「秋興八首」其七

【唐】杜甫

二九、三〇、三一はいずれも『全唐詩』卷二三〇。『千家詩』日本は二九が「秋興」。三〇と三一が「又」。『唐詩選』の他、黒川『杜甫上』、下定他『杜甫全詩』第三冊、向島『李杜の事典』、目加田『杜甫』など。◎

三二「黃巖舟中」

【宋】白玉蟾

『全宋詩』卷三一一三七(第六〇冊)、『千家詩』日本「月夜舟中」。石川『漢詩をよむ』(一九九六後期)。ただし作者は戴復古。○

※『千家詩』日本は戴復古の作とする。

三三「長安晚秋」

【唐】趙嘏

『全唐詩』卷五四九。『千家詩』日本「長安秋望」。『三体詩』(詩題「長安秋夕」)の他、小川『晚唐』、前野『唐詩鑑賞』。○

三四「秋」

【宋】孫僅

『全宋詩』卷一〇九(第二冊)。ただし前半のみ。『千家

詩』旧本「新秋」。訳注未見。×

※ この詩、『千家詩』旧本は杜甫の作とするが、杜甫の詩集には見えず、下定他『杜甫全詩』にも見えない。南宋・劉克莊の撰とされる『分門纂類唐宋時賢千家詩選』(『後村千家詩』)は前半四句のみを収録し、北宋・孫僅の作としており、『全宋詩』もこれに依拠している。

三五「中秋」 【宋】李朴

『全宋詩』卷一二七五(第二二冊)。訳注未見。×

三六「九日藍田崔氏莊」 【唐】杜甫

『全唐詩』卷二二四。『千家詩』旧本「九日藍田會飲」。石川『鑑賞辞典』、川合『名詩選(中)』、黒川『杜甫上』、下定他『杜甫全詩』第一冊、松浦『解釈辞典』、向島『李杜の事典』、目加田『杜甫』、吉川『杜甫詩注』第三冊など。◎

三七「秋思」 【宋】陸游

『全宋詩』卷二二〇〇(第四〇冊)。訳注未見。×

三八「南隣」 【唐】杜甫

『全唐詩』卷二二六。『千家詩』旧本「与朱山人」。下定他『杜甫全詩』第二冊、吉川『杜甫詩注』第九冊。○

三九「聞笛」 【唐】趙嘏

『全唐詩』失収。訳注未見。×

※ この詩、『千家詩』旧本は趙嘏の作として収録するが、少なくとも『全唐詩』には見えない。

四〇「初冬」 【宋】劉克莊

『全宋詩』卷三〇八一(第五八冊)。『千家詩』旧本「冬景」。訳注未見。×

四一「小至」 【唐】杜甫

『全唐詩』卷二三一。『千家詩』旧本「冬景」。下定他『杜甫全詩』第四冊。○

四二「山園小梅二首」其一 【宋】林逋

『全宋詩』卷一〇六(第二冊)。『千家詩』旧本「梅花」。石川『鑑賞辞典』、今關他『宋詩選』、入谷『宋詩選』、小川『宋詩選』、川合『名詩選(下)』、佐藤『宋詩附金』、前野『宋詩鑑賞』、松浦『統解釈辞典』、松枝『名詩選(下)』、山本他『宋代詩詞』など。◎

四三「左遷至藍關示姪孫湘」 【唐】韓愈

『全唐詩』卷三四四。『千家詩』旧本「自詠」。石川『鑑賞辞典』、清水『韓愈』、前野『唐詩鑑賞』、松浦『解釈辞典』、

松枝『名詩選(下)』など。◎

四四「題襄陽府九華寺壁」【宋】北来人

『全宋詩』失収。『千家詩』旧本「干戈」。訳注未見。×

※ この詩は『全宋詩輯補』(黄山書社、二〇一六)第十
一冊に収録されている。

四五「帰隠」【宋】陳搏

『全宋詩』巻一(第一冊)。訳注未見。×

四六「山中寡婦」【唐】杜荀鶴

『全唐詩』巻六九二。『千家詩』旧本「時世行」。松浦『名
詩集』、吉川他『唐詩選』。○

※ 吉川他『唐詩選』は、明・李攀龍の撰とされる同名の
書物とは内容が異なる。

四七「送天師」【明】寧献王

訳注未見。×

四八「送毛伯温」【明】世宗

訳注未見。×

※ 四七、四八の二首は明詩とされているが、少なくとも
清・錢謙益の『列朝詩集』および清・朱彝尊の『明詩

綜』には収録されていない。インターネット上の漢籍檢
索サイト『国学大師』によれば、旧時の通俗小説の文中
に挿入された詩のようであり、作者の信憑性についても
疑問が残る。

ついでながら、『千家詩』所収の五言の作品にも簡単に触れ
ておこう。五言絶句はすべて『唐詩選』と重複しており、五言
律詩は杜甫の二首を除き、他はすべて『唐詩選』と重複してい
る。重複していない杜甫の詩は「陪諸貴公子丈八溝携妓納涼晚
際遇雨二首」であるが、これらは下定他『杜甫全詩』第一冊お
よび吉川『杜甫詩注』第二冊(岩波書店、二〇一三)に訳注が
見える。すなわち、『千家詩』の五言の部分に収録されている
詩は、これですべて訳注が揃ったことになる。

調査結果の分析

以上の作業を経て、『千家詩』所収作品の日本における紹介
状況を、ほぼ確認することができた。是非とも押さえておくべ
き主要な文献は一通り確認したつもりであるが、なおも調査に
不十分な点があるかも知れない。もし決定的な遺漏があれば、
是非ご教示いただきたい。

まず七言絶句について。唐詩三十三首のうち、『三体詩』『唐
詩選』『唐詩三百首』のいずれかに収録されている詩は十九首

を占めている⁽⁶⁾。詳しく見るならば、『三体詩』十三首、『唐詩選』八首、『唐詩三百首』八首となり、『三体詩』との重複が最も多い。残りの詩もおおむね名作であり、大半の作品が◎または○となっている。若干の例外として、高蟾「下第後上永崇高侍郎」は柏木『聯珠詩格』以外に見いだすことができず△、李嘉祐「寄王舍人竹楼」はまったく訳注を見いだすことができず×。いずれも唐代ではマイナーな詩人の作品である。

これに対し宋詩六十一首の場合、数量が多いことに加え作品が玉石混濁なためもあり、紹介の程度にかなりのばらつきが見られる。錢鍾書『宋詩選注』所収の作品は十首、松浦『続鑑賞辞典』は司馬光と蘇軾の合計三首を収録、また朱熹の四首も単独の訳注がある。この他、NHKの漢詩テキストなどでもかなりの程度個別に紹介されているのだが、それでも◎と○をあわせても三十三首と約半数にとどまり、△が四首、×が二十四首と、約四割の詩がほとんど紹介されないままになっている。

次に、七言律詩について。唐詩二十四首のうち、『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』のいずれかに収録されている詩は十三首を占めている。詳しく見るならば、『三体詩』六首、『唐詩選』八首、『唐詩三百首』五首となり、『唐詩選』との重複が最も多い。残りの詩もおおむね名作であり、大半の作品が◎または○となっている。唯一の例外は趙嘏ちやうかの作とされる一首で、まったく訳注を見いだすことができず×。あるいは趙嘏の作風を模倣した後世の偽作なのかも知れない。

宋詩二十二首は、絶句の場合と同様、紹介の程度にかなりのばらつきが見られる。林逋、晏殊、歐陽修らの作品は紹介される機会にめぐまれており、特に林逋の詩は松浦『続解釈辞典』にも収録されているが、◎と○をあわせても九首にとどまり、△が一首、×が十二首。過半数の作品がほとんど紹介されないままになっている。

以上を要するに、『千家詩』の七言部分については、唐詩の場合は若干の例外を除いてほとんどの詩がすでに紹介されているのに対し、宋詩の場合は絶句・律詩のいずれも、まだ紹介されていない作品が少なくないことがわかった。

まとめ

かつて、私は『千家詩』所収の作品すべての訳注を作ることを見ていた時期があった。しかし時の流れと共に、徐々に考えが変わって行った。時間をかければ全詩の訳注を作ることは不可能ではないかも知れないが、仮にできたとして、果たしてどれほどの意味があるであろうか。何と言っても、五言の部分ではほとんどが『唐詩選』と重複しているの、今さら新しい訳注を作ってもあまり意味がない。となると、残るは七言の部分であるが、これとて今さら紹介するまでもない詩が少なくない。そこで、これまで宋詩を中心に研究を続けて来た私としては、『千家詩』七言部分のうち、まだ訳注の存在しない宋詩の

部分（主に宋代の無名詩人たち）を、今後の主な研究対象に定めることにしたいと思う。あるいは「労多くして功少なし」ということになるのかも知れないが、これらの詩を研究することは、学術的に一定の意義があるはずと、私は考えている。私の『千家詩』研究は、まだ緒に就いたばかりである。

最後に、この小稿が少しでも漢詩の研究者および愛好家の参考になることを念じつつ、筆を擱くことにしたい。

注

- (1) 『千家詩』の成立の過程については、楊万里等注評『図文本千家詩』（上海古籍出版社、二〇〇二年）前言参照。
- (2) いわゆる杜牧「清明」詩の問題点については、松浦友久『校注唐詩解釈辞典』参照。
- (3) この他、『唐詩選』には齋藤响『唐詩選』（集英社、一九九六）、高木正一『唐詩選』（朝日新聞社、一九九六）などがあり、『唐詩三百首』には田部井文雄『唐詩三百首詳解』（大修館書店、一九八八）、江口孝夫『対訳唐詩三百首』（勉誠出版、二〇〇八）などがある。
- (4) 小沢書店発行の中国名詩鑑賞シリーズは、一通り参照したものの、紙幅の都合で割愛した。重要度が低いと判断したためではなく、調査が後回しになったためである。大変申し訳ないことであるが、仮にこれらを記載したとしても、調査結果に大きな変更は起こらない。
- (5) 以下に「訳注」とあるのは、当然ながら、すべて現代日本語

による訳注をさす。現代中国語による訳注としては、前掲の李夢生『千家詩全解』があるので参照されたい。
 (6) ただし杜常「華清宮」を除く。本稿では同詩を宋詩として扱ったためである。